大阪府埋蔵文化財調査報告2011－5

# 金　岡　遺　跡

大阪府教育委員会

# 金　岡　遺　跡

大阪府教育委員会

# 序 文

金岡遺跡は、堺市北区金岡町にある弥生時代から中世に至る複合遺跡です。現在までの発掘調査で、弥生時代の竪穴式住居や古墳時代から奈良・平安時代にかけての掘立柱建物跡などが数多く検出されていて、大規模な集落跡であることが判明しています。

大阪府教育委員会では、府立金岡高等学校の下水道放流切替工事に先立ち、平成20年度に発掘調査を実施しました。その結果、飛鳥時代の溝や奈良時代の井戸・柱穴などの遺構が検出され、須恵器や土師器などの遺物が多数出土しました。これらの遺構・遺物は、当地域の歴史を解明していく上で、かけがえのない貴重な資料になるものと思われます。

本調査の実施にあたっては、府立金岡高等学校の方々をはじめ、大阪府教育委員会事務局施設課等の関係各位に多大なご指導とご協力を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政により一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成24年3月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　　野口　雅昭

# 例 言

1．本書は、大阪府教育委員会施設課から依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が実施した府立金岡高等学校下水道放流切替工事に伴う堺市北区金岡町所在、金岡遺跡の発掘調査報告書である。

2．現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ主査西口陽一・藤澤眞依が担当し、平成20年度に実施した。遺物整理は、調査管理グループ主査三宅正浩・副主査藤田道子が担当し、平成23年度に実施した。

3．本調査の調査番号は、08017である。

4．出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

5．本調査の基準点測量は、富士測量株式会社に委託した。

6．本調査で作製した記録資料と出土遺物は大阪府教育委員会で保管している。

7．本書の編集・執筆は、藤澤が担当した。

8．発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した経費は、すべて大阪府教育委員会が負担した。

9．本報告書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、525円である。

# 本文目次

序文
例言
目次
第１章　調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２章　遺跡周辺の歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第３章　調査結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（１区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（２区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（３区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（４区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
（５区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
（６区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
（７区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
（８区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
（９区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
（10区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
（11区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
（12区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
（13区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
（14区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
（15区）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
（６～15区出土遺物）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第４章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

# 挿図目次

第１図　明治18年仮製地図による調査地位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２図　金岡遺跡（182）周辺遺跡分布図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３図　調査区配置図（１/1,500）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第４図　１区・３区・４区遺構平面図・断面図（１/40）　・・・・・・・・・・・・・・・5
第５図　１区（１～４）、３区（５）出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・6
第６図　調査区平面図（S= 1/500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第７図　４区・６区遺構平面図（S= 1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第８図　６区・７区遺構平面図（S= 1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第９図　７区・８区遺構平面図（S= 1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第10図　８区・９区遺構平面図（S= 1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第11図　９区・10区遺構平面図（S= 1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第12図　10区・11区遺構平面図（S= 1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第13図　11区・12区遺構平面図（S= 1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第14図　12区・13区遺構平面図（S= 1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第15図　14区・15区遺構平面図（S= 1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第16図　８区（６）・９区（７）・11区（８～15）
・12区（16～20）出土遺物実測図（S= 1/4）・・・・・・・・・・・・・22
第17図　14区（21～28）・15区（29～31）出土遺物実測図（S= 1/4）・・・・23

# 図版目次


図版１　　１区～５区遺構

１区ピット検出状況（南から）
１区ピット検出状況（南西から）
１区ピット２掘削状況（南から）
２区・５区調査状況（南から）
３区ピット検出状況（南から）
３区ピット掘削状況（南西から）
４区掘削状況（南東から）
４区ピット掘削状況（北から）

図版２　　６区～９区遺構

６区（東南から）
６区（西北から）
８区 SD01・SP02 確認状況（西から）
８区 SD01・SP02 掘削状況（西から）
９区西半部遺構確認状況（西から）
９区 SP06 検出状況（西から）
９区 SP06 確認状況（西から）
９区 SP06 掘削状況（西から）

図版３　　９区～ 10 区遺構

９区 SX08・SP09・10 検出状況（東から）
９区 SX08・SP09・10 確認状況（東から）
９区 SX08 完掘・SP12 確認状況（北から）
９区 SP12 検出状況（北から）
９区 SP09・12 掘削状況（東から）
９区 SP09・12 完掘状況（東から）
９区 SP09・10 区 SP11 完掘状況（北から）
９区 SP12 完掘状況（北から）

図版４　　10 区～ 11 区遺構

10 区中央（西北から）
10 区東南（西北から）
10 区北半部遺構検出状況（北から）
10 区北半部遺構掘削状況（北から）
10 区 SD13 検出状況（西から）
10 区 SD13 掘削状況（西から）
11 区 SP14・15 遺構検出状況（西から）
11 区 SP14・15 遺構掘削状況（西から）

図版５　　11 区～ 12 区遺構

11 区 SD16 検出状況（西から）
11 区 SD16 掘削状況（西から）
11・12 区遺構確認状況（北から）
11・12 区遺構検出状況（北から）
11 区 SX17 確認状況（北西から）
11 区 SX17 検出状況（北西から）
11 区 SX17 遺物出土状況（西から）
12 区 SX17 遺物出土状況（西から）

図版６　　12区～13区遺構

12区遺構確認状況（北から）
12区遺構検出状況（北から）
12区SD18・19・20掘削状況（北から）
12区SD20完掘状況（西から）
12区SD21完掘状況（西から）
12区南端遺構確認状況（北から）
12区南端遺構確認状況（西から）
13区遺構確認状況（東から）

図版７　　14区～15区遺構

14区西南部（東北から）
14区西南部遺構検出状況（東北から）
14区西南部遺構掘削状況（東北から）
14区SK25・26（東北から）
14区東端部遺構掘削前（南西から）
14区東端部SK27（南西から）
15区南西部（東北から）
15区東北部（東北から）

図版８　　遺物１

8区SD01出土須恵器杯蓋
12区SX17出土須恵器杯
12区SD20出土フイゴ羽口
12区SX18出土須恵器壺
14区SK27出土須恵器壺
14区包含層出土平瓦
15区包含層出土平瓦

図版９　　遺物２

9区～14区出土土師器
14区出土製塩土器

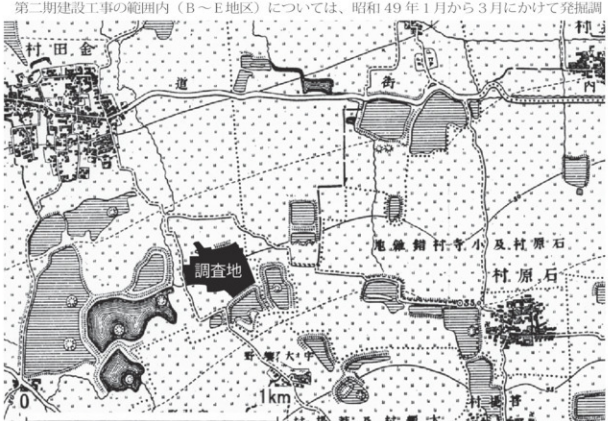
# 第１章　調査に至る経過

金岡遺跡は、昭和 48 年度に、大阪府教育委員会によって発見された遺跡である。本遺跡は、南海高野線白鷺駅の東方約 1.2km の地に位置し、洪積台地上にある。標高は、26 ～ 27 mで、周囲には、田畑やため池等が数多く残っている（第１図）。

本遺跡の本格的な発掘調査は、昭和 48 年度に始まった。当時は、人口のスプロール化に伴って周辺都市に人口が集中する傾向があり、大阪府教育委員会では、高等学校の不足を補うため毎年数校の高等学校の建設を行なっていた。その内の一校（第 93 高校）として、堺市金岡町に建設が計画された。その計画にもとづき、現地踏査が実施されると、その用地が北に寺池、東に城ヶ池、南に堂ヶ池といった由緒ある名をもつ池に囲まれることが判明し、奈良時代前後の遺物の散布が認められ、新たな遺跡の存在が確認された。続き、用地内各地点に試掘調査が施され（幅 1.5 m、長さ延 900 mのトレンチ）、最も遺構の少ないと考えられる地区に校舎を配置することとし、その上で、改めて校舎用地の発掘調査が実施された。

第一期建設工事の範囲内（Ａ地区）については、昭和 48 年５月から７月にかけて発掘調査が実施され（2,800㎡）、弥生時代中期の竪穴式住居、古墳時代中期の溝・落ち込み、中世のピット群などが検出され、石鏃、サヌカイトの破片、土師器・須恵器、円筒埴輪、瓦器などがコンテナ約 10 箱分出土した。

第二期建設工事の範囲内（Ｂ～Ｅ地区）については、昭和 49 年１月から３月にかけて発掘調




第１図　明治 18 年仮製地図による調査地位置図

査が実施され（3,975㎡）、奈良・平安時代の掘立柱建物・井戸・溝・土坑などの遺構が多数検出され、須恵器・土師器・曲物・斎串・三彩小壷・瓦器・青磁などの遺物が多数出土した

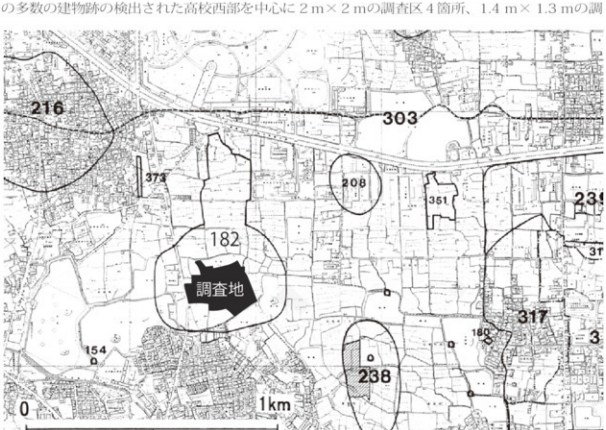
その後、平成２年２月から３月にかけて、金岡遺跡の北西部に位置する箇所で個人住宅の新築工事に伴う発掘調査が堺市教育委員会によって行なわれた

平成４年７月から平成５年３月にかけては、金岡遺跡の北側に位置する箇所で、堺市の清掃工場の建設に伴う発掘調査が堺市教育委員会によって行なわれ、遺跡範囲がさらに北に拡大した

平成 14 年２月、金岡高等学校北東隅でセミナーハウス建設に伴う確認調査が大阪府教育委員会によって行なわれた。地表下 1.5 mで学校建設前の耕作土を検出し、耕作土から約 0.2 m下で古代～中世の遺構面に相当する面を確認した。

今回、本書で報告する調査結果は、府立金岡高等学校内で大阪府教育委員会施設課が計画した下水道放流切替工事に伴うものである。工事の概要は、「校舎系統」「プール系統」の２系統の下水管を高校の正門付近で合流させ、公共下水につなぐものである。「校舎系統」は、地下埋設管が多いため、ＧＬ－ 2.9 ～ 3.6 mのシールド工法になる。シールド工法の部分は、遺構面よりはるか下なので、調査の必要はなかったが、５箇所ある竪坑部分は、調査が必要であった。「プール系統は、プール南側の 21 枡までは、掘削深度が浅いため、調査の必要はなかったが、その他の管路部分は深いので、矢板を打って、オープンで掘削するため、調査が必要であった。

平成 20 年 10 月から 12 月にかけて、昭和 48 年度の調査で奈良時代から平安時代にかけての多数の建物跡の検出された高校西部を中心に２m×２mの調査区４箇所、1.4 m× 1.3 mの調



第２図　金岡遺跡（182）周辺遺跡分布図

査区１箇所と２ｍ×２ｍの調査区をつなぐように幅 1.0 ～ 1.5 ｍの管路部分を延長約 100 ｍ、合計 140㎡を発掘調査した。遺構は、柱穴・井戸・土坑等を検出し、古代から中世の遺物が出土した。

# 第２章　遺跡周辺の歴史的環境

金岡遺跡の範囲は、大阪府教育委員会や堺市教育委員会による調査の結果、現在では、東西 520 ｍ南北 780 ｍと判明している（第２図 182）。遺跡の時期は、弥生時代中期に始まり、古墳時代や中世の遺物も出土しているが、中心となるのは奈良時代のものである。

金岡遺跡の北側 80 ｍには、飛鳥時代以来の歴史のある竹ノ内街道（第２図 303）が東西に走っている。

金岡遺跡の北西 230 ｍには、金岡西遺跡（第２図 373）があり、奈良時代の掘立柱建物跡・柵列・ピット群等が検出されている

第３図　調査区配置図（S=1/1500）

金岡遺跡の南西 300 ｍには、長池窯跡（第２図 154）があり、古墳時代の須恵器窯跡が発見されている。須恵器窯跡は、金岡遺跡の南東 270 ｍの石原町遺跡（第２図 238）や東方 400 ｍの植池でも発見されている。石原町遺跡では、旧石器時代の翼状剥片や縄文時代の有舌尖頭器等の古い遺物も発見され、鎌倉時代から南北朝時代の溝・土坑・土塁状堤などの遺構も検出されている

金岡遺跡の北東 370 ｍには、中世の集落跡である石原町北遺跡（第２図 208）があり、金岡遺跡の北西 500 ｍには、中世・近世の集落跡・社寺跡である金岡神社遺跡（第２図 216）が発見されている

(註)

① 大阪府教育委員会『金岡遺跡発掘調査概要』『大阪府文化財調査概要 1973-10』、1974 年

② 堺市教育委員会「金岡遺跡発掘調査報告」『平成２年度国庫補助事業発掘調査報告』、1991 年

③ 堺市教育委員会「金岡遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第 42 冊、1994 年

④ 大阪府教育委員会『金岡西遺跡』『大阪府埋蔵文化財調査報告 2000－7』、2001 年

⑤ 堺市教育委員会『石原町遺跡現地説明会資料』、1986 年

⑥ 堺市教育委員会『金岡神社遺跡発掘調査報告』『堺市文化財調査報告』第 22 集、1985 年
堺市教育委員会『金岡神社遺跡（ＫＯＺ－１）発掘調査報告』『堺市文化財調査報告』第 38 集、1988 年

# 第３章　調査結果

（１区）　長さ２m幅２mの調査区。調査区は、体育館の北西部に位置している。現状は、アスファルト舗装されていて、その下には、15cmの厚さに砕石が入れてあった。砕石の下60cm程が高校造成時の山土による盛土（茶灰色真砂土）であった。調査区北壁では、旧耕土である暗灰色粘質土層の畝断面が３畝観察された。厚さ４～20cmの旧耕土の下には、厚さ２～３cmの床土である黄褐色粘土層があって、酸化鉄が多く沈積していた。床土の下、厚さ８cm程は、灰褐色粘土層で、遺物や石などを含まない層であった。灰褐色粘土層の下に、黒マンガン層が堆積し、中世の耕作土と推測された。その下に、厚さ６cm程の暗灰褐色粘質土層が検出され、奈良時代の土師器杯（第４図１）、生駒西麓産の土師器羽釜、製塩土器、須恵器杯身、甕などが36片出土した。遺物包含層と判断された。この遺物包含層を除去すると、地山である黄灰色粘土層上に平らな遺構面が検出された（第３図）。地表下だと約1.2ｍ下であった。

ピット１は、その南半のみが検出され、北半は調査区外であった。東西58cm南北36cm以上、やや丸い平面形であった。深さは40cm、底は平らであった。埋土は２層あり、上層の黒褐色粘質土層中に奈良時代の土師器杯（第４図２）、生駒西麓産の土師器羽釜（第４図３）、須恵器片等が27片出土し、炭片と共に柱痕埋土に投入されたものと考えられた。下層は茶褐色粘土層であった。

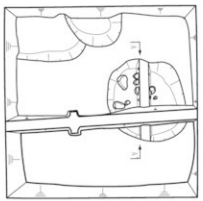
ピット２は、ピット１の南東側で検出された。東西84cm南北95cm、楕円形の土坑。南半の一部が現代のガス管によって損壊されていた。埋土は暗灰褐色粘質土層で、上面から15cm掘削すると、10～15cm大の石が10数個出てきた。その下層はさらに下がり、深さ65cmまで達した。底は、平らであった。壁面は厚さ55cmの黄褐色粘土層の底に厚さ15cmの固い暗茶褐色砂礫層があり、湧水があった。埋土中から奈良時代の須恵器杯蓋（内面に墨痕あり）（第４図４）・土師器甕片等が出土し、素掘りの井戸と考えられた。

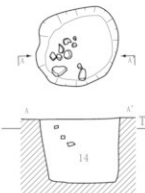
ピット３は、調査区北西隅で検出された。東西長さ68cm以上、南北48cm以上で、平面形は楕円形と推定された。北・西半分は、調査区外である。東側はピット１に切られている。埋土は灰褐色粘質土層で、奈良時代の生駒西麓産の土師器羽釜・甕片が出土した。深さは９cmで、底は平らで、浅い土坑と考えられた。

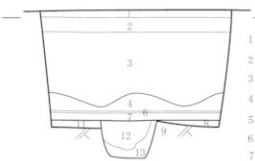
（２区）　長さ２m幅２mの調査区。調査区は、体育館の北東部に位置している。深さ1.4ｍまで掘削したが、アスファルト・砕石・真砂土の下に、地山である黄灰色粘土層が検出された。高校造成時に、旧耕土・遺構面が大規模に削られていたもようである。遺構・遺物は、共に検出されなかった。

（３区）　長さ２m幅２mの調査区。調査区は、体育館の東側に位置している。アスファルト・砕石の下に厚さ65cm程の盛土があった。盛土の下に厚さ10cmの旧表土と厚さ２cmの床土があった。床土の下に厚さ10cmの灰褐色粘質土層があり、灰褐色粘質土層の下に黒マンガン層が

1区

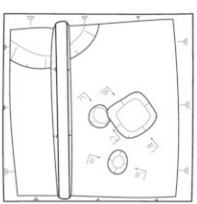




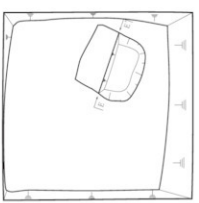



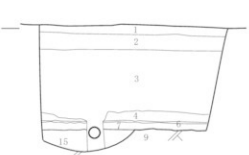

1　アスファルト
2　砕石
3　灰茶褐色真砂（学校造成盛土）
4　灰黒色土（旧耕土）
5　灰色粘質土
6　茶褐色粘土（旧床土）
7　灰褐色粘質土（奈良時代遺物包含）
8　茶褐色粘質土（礫混じり）
9　黄灰色粘土（地山）
10　茶褐色砂礫（地山）
11　黒褐色粘質土（SP01の埋土）
12　茶褐色粘土（SP01の埋土）
13　暗灰褐色粘質土（SP03の埋土）
14　暗灰褐色粘質土（SP02の埋土）

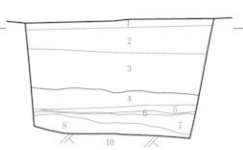
3区



4区





15　暗灰褐色粘質土（SP07の埋土）
16　暗灰褐色粘質土（SP04～06の埋土）
17　茶褐色粘質土（SP08の埋土）

第4図　1区・3区・4区遺構平面図・断面図（S＝1/40）

堆積していた。地山である黄灰色粘土層上に、平らな遺構面が検出された（第３図）。地表下だと約 1.1 m下であった。

ピット１は、長辺 45cm 短辺 42cm、平面形は隅丸方形であった。深さは、24cm で、マンガンを多量に含有した暗灰色粘質土層で、底は平らであった。柱穴と考えられたが、柱痕や柱抜き取り痕は確認できず、遺物も出土しなかった。

ピット２は、南北 25cm 東西 22cm の楕円形ピットである。深さ 10cm で、底は丸かった。埋土は、暗灰色粘質土層で、奈良時代の須恵器杯身、脚台片（第４図５）が２片出土した。ピット２の東端は、ピット１で切られていた。

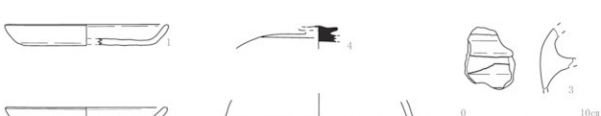
ピット３は、南北 25cm 東西 21cm の楕円形ピットである。深さ 11cm で、底は丸かった。埋土は、暗灰色粘質土層で、遺物は出土しなかった。

ピット４は、調査区北西隅で検出された。東西 54cm 以上、南北 50cm 以上の大きさで、北・西半分は調査区外である。中央を現代のガス管によって損壊されていた。底は丸く、大きな土坑と考えられた。埋土は、暗灰色粘質土層で、遺物は出土しなかった。

（４区）　長さ２m幅２mの調査区。調査区は正門の東側に位置している。アスファルト・砕石の下に厚さ 40cm 程の真砂土があった。真砂土の下に厚さ 10 ～ 20cm の旧耕土があった。旧耕土の下に厚さ５cm 程の灰色粘質土層があり、その下に酸化鉄の沈積が多い黄褐色粘質土層があった。床土と考えられた。その下に灰褐色粘質土層と茶褐色（礫混じり）粘質土層が堆積していたが、共に北側から南側に傾きをもっていた。地山である茶褐色砂礫層上にピットが検出されたが、地山も北と南では、13cm の傾きがあった。遺構面は、地表下だと約 1.2 m下であった。遺物包含層である茶褐色（礫混じり）粘質土層中から奈良時代の土師器杯が２片出土した。

ピット１は、南北 67cm 東西 70cm の隅丸方形である。埋土は、暗こげ茶色粘質土層で、ピット北隅の径 20cm の円形範囲のみに炭が混じっていた。ピットの深さは 16cm で、底は平らであった。遺物は出土しなかった。浅いピットのため、上層が削平されてしまったものなのか、もとから柱穴でなかったのかは、不明であった。

（５区）　長さ 1.4 m幅 1.3 mの調査区。調査区は食堂の西側に位置している。アスファルト・砕石・真砂土を地表下 1.9 mまで掘削したが、すべて盛土であった。地山である黄灰色粘土層が検出されたが、旧耕土・床土もなく、遺構も遺物も検出されなかった。高校造成時に削平されていたようである。




第５図　１区（1～4）、３区（5）、出土遺物実測図

（６～15区） 調査地は高等学校校内道路部分である。現地表面の標高は調査範囲内ではほとんど変わらずT.P.+30.8 mを測る。基本土層はアスファルト・コンクリート・路盤材が約0.4 m、造成時の盛り土が0.4 ～0.2 m、黒色土（高校造成以前の耕作土）が0.15 ～0.2 m、黄色粘土（床土）が0.5 m、灰褐色土が0.25 ～0.0 mを測る。灰褐色土は６区と７区の一部で確認されたが、そのほかの調査区では確認できなかった。遺構面の標高は６区でT.P.+29.55 m、７区でT.P.+29.9 m、９区でT.P.+29.9 m、14区でT.P.+29.9 m、12区でT.P.+29.85 m、を測る。６区の地山面の標高が他よりも0.3 ～0.35 m低くなっているが、旧水田面は約0.25 m客土された上に造られており、水田面の高さは他の調査区の水田面よりも0.1 m程度低いだけである。他の調査区は地山面を削平して水田を造成している。

（６区） ４区から東南方向に伸びる幅１m長さ約11 mの管路部分と２m角の枡部分からなる調査区である。遺構・遺物は出土しなかった。

（７区） ６区から東南東方向に伸びる幅１m長さ約13 mの管路部分と２m角の枡部分からなる調査区である。遺構は東端枡部分で落ち込みの一部を検出した。遺物は出土しなかった。

（８区） ７区から東南東方向に伸びる幅１m長さ約13 mの管路部分と２m角の枡部分からなる調査区である。遺構は溝・ピット・落ち込み等を検出した。遺物は須恵器の蓋等を出土した。

SD01 は中央で検出した調査区を南北に横断する溝である。北で僅かに東へ湾曲する。南北両端は調査区域外に続く。幅は0.9 ～1.0 m、深度は0.1 mを測る。東側0.4 ～0.45 m幅でさらに0.1 m深くなっており、断面形状は２段となっている。埋土は１層で灰褐色土である。溝底より須恵器の蓋（第16図6）等が出土した。

SP02 はSD01 の東で検出した円形のピットである。直径0.22 ～0.25 m、深度0.15m を測る。埋土は１層で灰褐色土である。

SD03 は東端で検出した東南から北に湾曲しながら調査区を横断する溝である。南北両端は調査区域外に続く。断面形状は浅い皿状で、深度は0.1m を測る。埋土は１層で灰褐色土である。

SX04 は西端で検出した調査区を南北に横断する溝状の落ち込みである。幅は4.2m を測る。断面形状は浅い皿状で、深度は西端で0.1 m、東端で0.15 mを測るが、肩部の高さが東側が0.05 m高いため、底部はほぼ平坦である。埋土は１層で灰褐色土である。

SD05 は中央で検出した調査区を南北に横断する溝状の落ち込みである。東端は埋管による攪乱で不明である。検出幅は0.5 mを測る。断面形状は浅い椀型で、深度は0.1m を測る。埋土は１層で灰褐色土である。遺物は須恵器の破片が出土した。

（９区） ８区から東南東方向に伸びる幅１m長さ約15 mの管路部分と２m角の枡部分からなる調査区である。遺構は溝・ピット・落ち込み等を検出した。遺物は土師器の杯等を出土した。

SP06 は西端で検出した不整方形の柱穴である。南端部は調査区域外に続く。実際には段堀になっており、２段目は隅丸長方形を呈する。直径0.18 mの柱痕跡が２段目中央やや北寄りにある。埋土は２段目部分に１灰褐色土（黄色粘土ブロック混じり）が0.18 ～0.2 m、１段目部分に２

灰褐色土（黄色粘土混じり）0.08 ～ 0.1 m埋められており、柱痕跡に３灰色土が堆積している。柱は抜き取られたようであり、木質は残っていなかった。

SP07 は中央で検出した円形のピットである。直径は 0.4m、深度は 0.15m を測る。断面形状は椀型を呈する。埋土は２層で、中央に検出面から底面まで灰色土が直径 0.12 ～ 0.1 m、周辺部に灰褐色土が堆積している。埋土からは一見柱痕跡のように見えるが、底部に何の痕跡もないことからとりあえずピットとした。

SX08 は東端で検出した調査区を南北に横断する不整形の落ち込みである。東西長 2.15 m、南北長は調査区域外に続くため不明である。深度は全体に 0.07 ～ 0.12 mを測るが、中央部が南北方向の溝状に凹んでいる。溝状部の深度は 0.05 ～ 0.1m を測る。埋土は１層で、灰褐色土である。埋土が１層であることから２つの遺構が重複しているのではないと考えられる。

SP09 は東端で検出した方形の柱穴である。各辺はほぼ東西南北を指している。東西長 0.65 m、南北長 0.65 m、深度は 0.35 mを測る。中央やや西寄りに柱痕跡を検出した。埋土は３層で、底から灰褐色粘土が 0.05 m、灰黄色土が 0.3 m、柱痕跡内には灰色粘土が堆積していた。柱痕跡の直径は 0.15m を測り、底部は周辺よりも 0.01 ～ 0.02 m深くなっている。

SP10 は SP09 の東辺北側に位置する円形のピットである。SP09 に一部切られており、SP09 よりも古い遺構である。南北長は 0.3 m、検出東西長は 0.18 m、深度は 0.06 mを測る。埋土は１層で茶褐色土である。

SP12 は東端 SX08 内で検出した隅丸方形の柱穴である。SX08 の埋土を除去した後に検出したことから、SX08 よりも古い時期の遺構である。各辺はほぼ東西南北を指している。東西長 0.65 m、検出南北長 0.5 m、深度は 0.4 mを測る。西南隅から直径 0.15 mの柱痕跡を検出した。柱痕跡底部は周辺より 0.02 m深くなっている。埋土は５層で、下から黄色粘土 0.15 m、灰褐色粘土 0.05 m、周辺部に黄色粘土が 0.15 m、中央部に灰褐色粘土が 0.15 mと交互に埋められており、柱痕跡内に水分の多い灰色粘土が堆積していた。

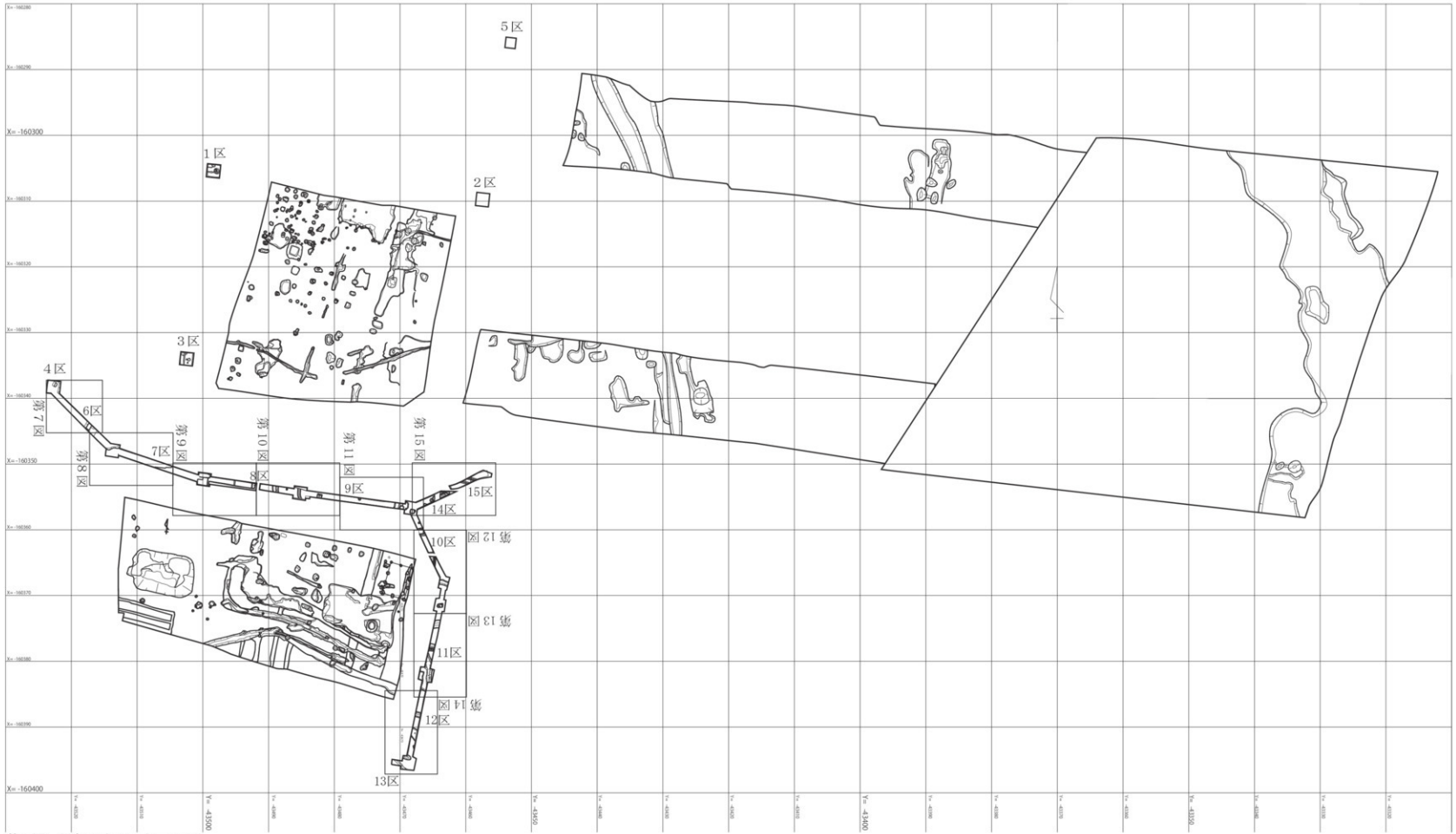
（10 区） ９区から南南東方向に伸びる幅１m長さ約 10 mの管路部分と２m角の枡部分からなる調査区である。遺構は溝・ピット等を検出した。遺物は古代の土器を少量出土した。

SP11 は北端で検出した円形のピットである。直径 0.25 m、深度 0.18 mを測る。埋土は１層で、灰褐色土である。

SD13 は調査区を東西方向に横断する溝である。幅 0.7 ～ 0.78 m、深度 0.2 mを測る。断面形状は浅い椀型である。埋土は１層で灰褐色土である。

（11 区） 10 区から南南西方向に伸びる幅１m長さ約 12 mの管路部分と２m角の枡部分２カ所からなる調査区である。遺構は溝・ピット・落ち込み等を検出した。遺物は土師器・須恵器・羽釜等を出土した。

SP14 はやや平行四辺形のピットである。各辺はほぼ東西南北を指している。東西長は 0.55 m、南北長は 0.6 m、深度 0.2m を測る。底部中央東寄りに直径 0.18 m、深度 0.05 mの浅い凹み




第6図　調査区平面図（S＝1/500）

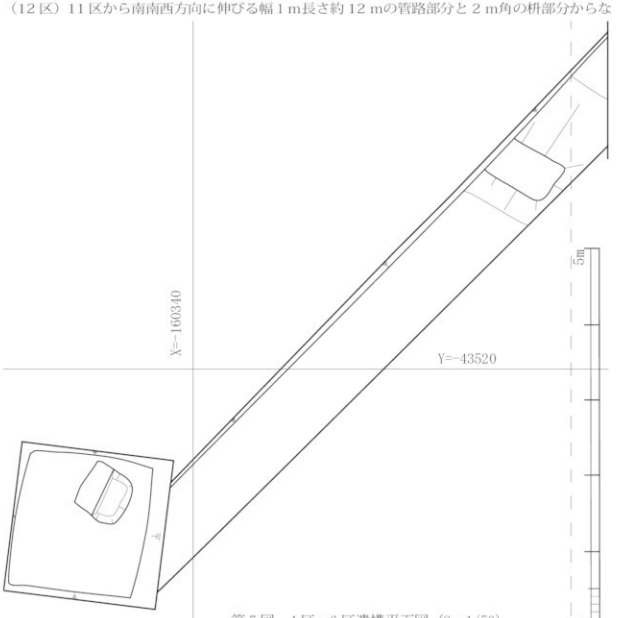
があり、柱痕跡とも考えられるが、不明である。

SP15 はやや不整楕円形のピットである。SP14 に東部を切られているため詳細な形状は不明である。検出東西長は 0.4 m、南北長は 0.6 m、深度 0.05m を測る。底部西北隅部が直径 0.25 m、深度 0.15 mの凹みとなっている。柱痕跡とも考えられるが、不明である。

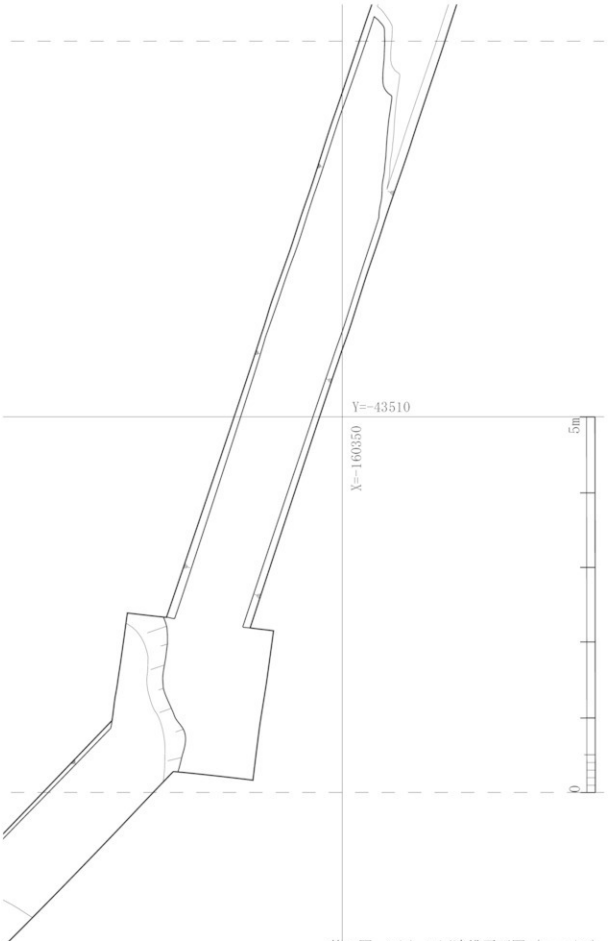
SD16 は調査区を東西方向に横断する溝である。幅 1.2 ～ 1.25 m、深度 0.2 mを測る。断面形状は浅い椀型である。埋土は 1 層で灰褐色土である。

SX17 は 11 区と 12 区にまたがって検出した不定形の落ち込みである。全体的には調査区の東南から西北に流れる溝のようである。中央部での幅は 1.2 ～ 1.4 m、深度 0.2m を測る。断面形状は東側にテラスを持つ 2 段堀担っている。テラス部の深度は 0.1m を測る。埋土は 1 層で灰褐色土である。遺物は須恵器の杯・壷（第 16 図 8 ～ 11）、土師器の杯・甕・羽釜等（第 16 図 12 ～ 14）等が出土した。

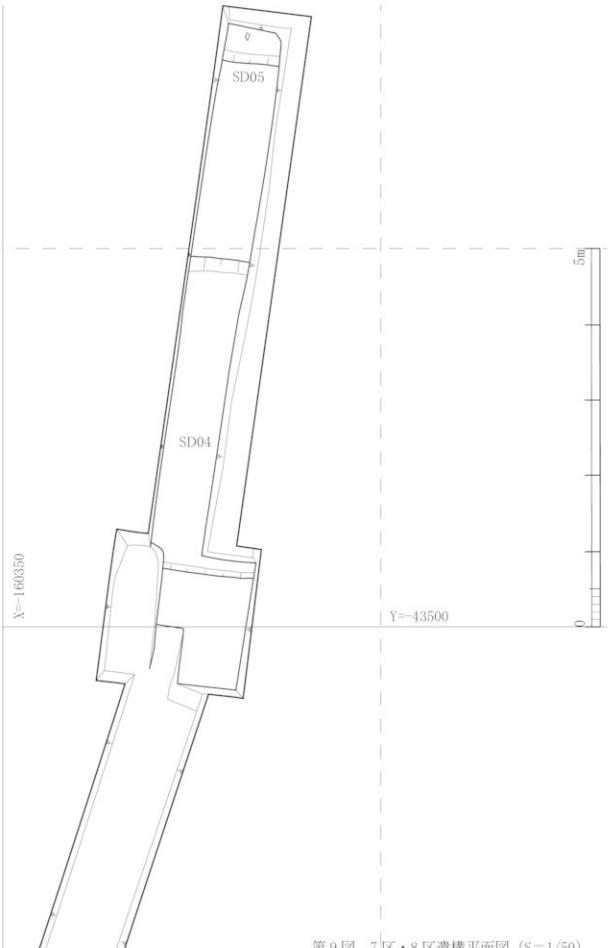
（12 区）11 区から南南西方向に伸びる幅 1 m長さ約 12 mの管路部分と 2 m角の枡部分からな



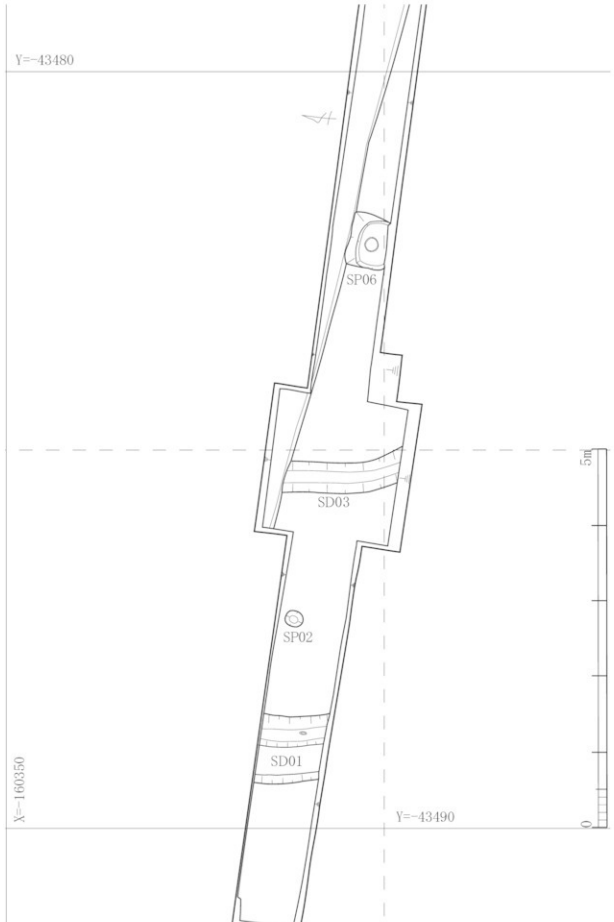

第 7 図　4 区・6 区遺構平面図（S＝1/50）



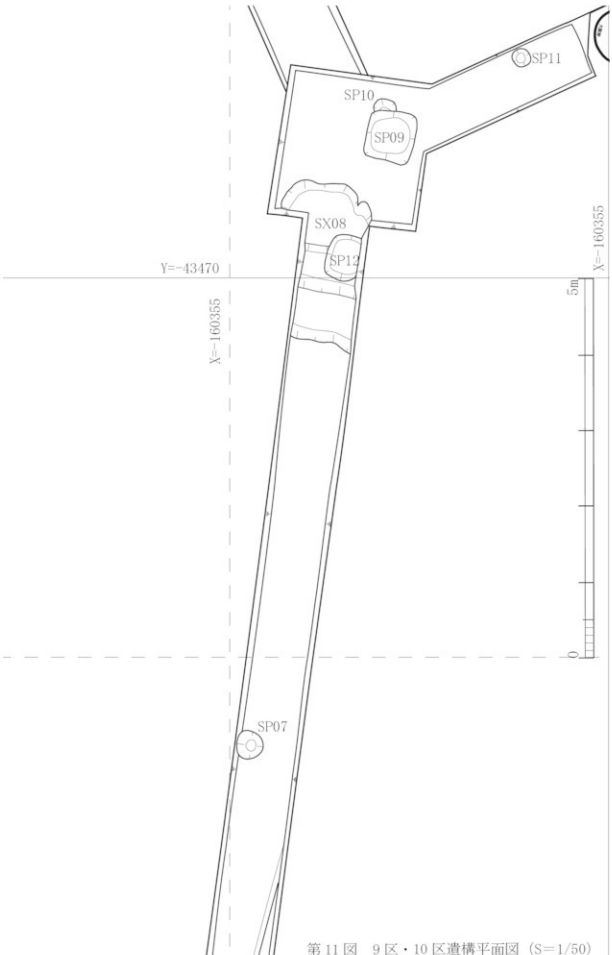

第8図　6区・7区遺構平面図（S＝1/50）



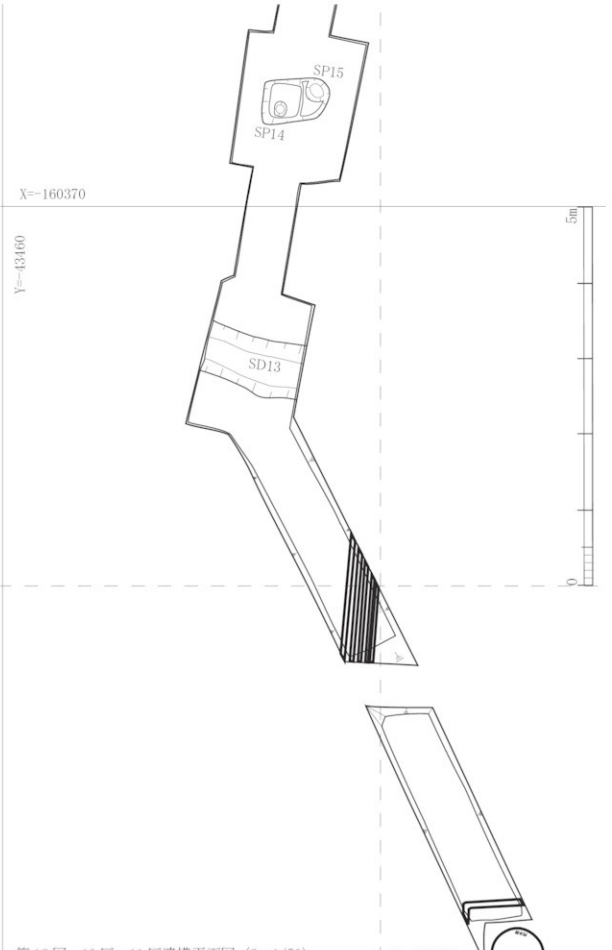

第9図　7区・8区遺構平面図（S＝1/50）



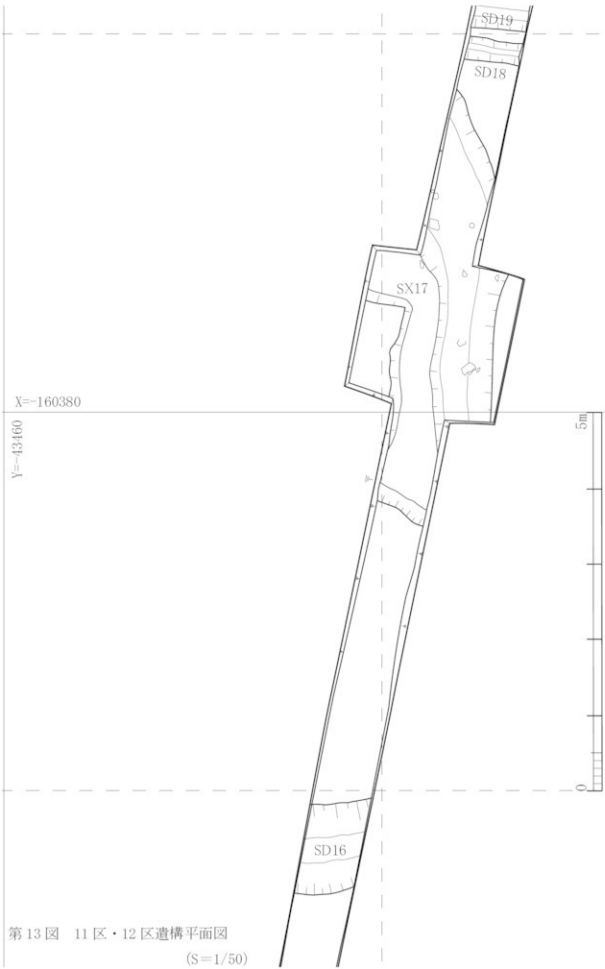

第10図　8区・9区遺構平面図（S＝1/50）



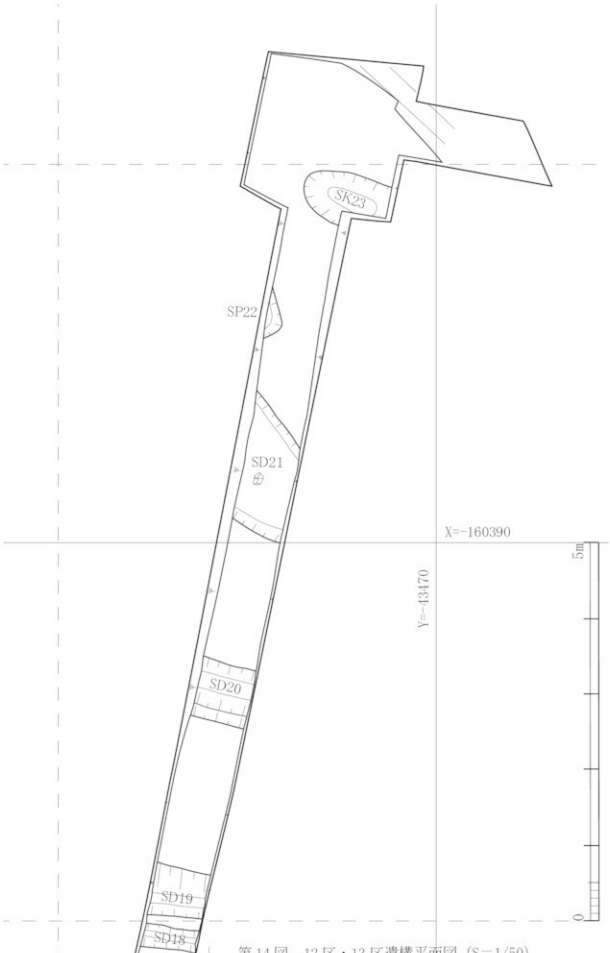

第 11 図　9 区・10 区遺構平面図（S＝1/50）



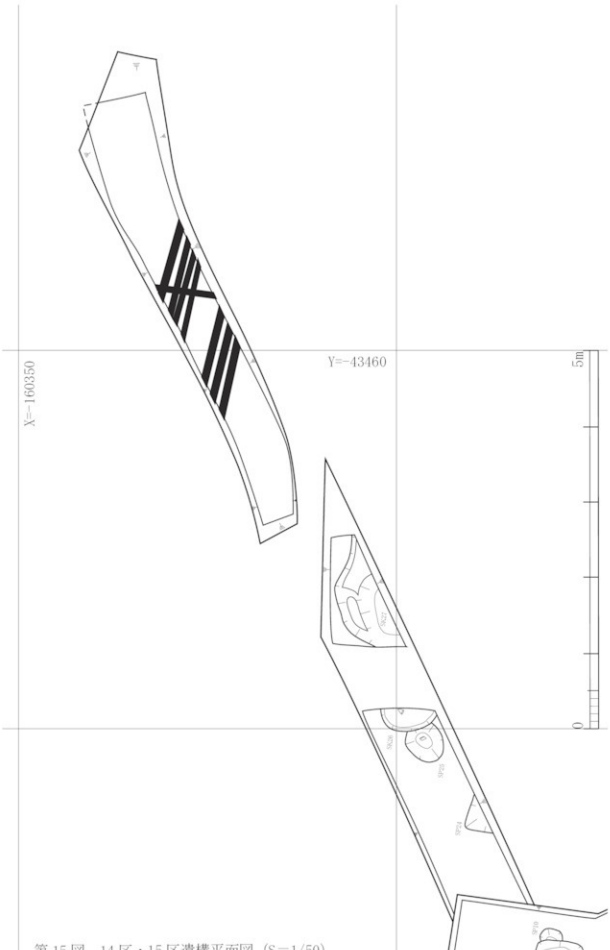

第 12 図　10 区・11 区遺構平面図（S＝1/50）




第 13 図　11 区・12 区遺構平面図
(S＝1/50)




第 14 図　12 区・13 区遺構平面図（S＝1/50）




第 15 図　14 区・15 区遺構平面図（S＝1/50）

る調査区である。遺構は溝・土坑等を検出した。遺物は古代の土器・フイゴの羽口等を出土した。

SD18 は SX17 の南で検出した調査区を東西に横断する溝である。幅 0.3 m、深度 0.05m を測る。断面形状は浅い椀型である。埋土は 1 層で灰褐色土である。遺物は須恵器の杯（第 16 図 16）、須恵器の壺（第 16 図 17）等が出土した。

SD19 は SD18 の南に隣接して検出した調査区を東西に横断する溝である。幅 0.6 ～ 0.7 m、深度 0.15m を測る。断面形状は最深部を北側に寄せた浅い椀型で、埋土は灰褐色土 1 層である。

SD20 は調査区を東西に横断する溝である。幅 0.8 m、深度 0.2m を測る。断面形状は最深部を南側に寄せた浅い椀型である。埋土は 1 層で灰褐色土である。遺物は須恵器の杯（第 16 図 18）、土師器の甕（第 16 図 19）、フイゴの羽口（第 16 図 20）等が出土した。

SK21 は SD20 の南で検出した調査区を東南から西北に斜断する楕円形の土坑である。検出幅 1.4 m、検出長 2.1 m、深度 0.25m を測る。断面形状は最深部を北側に寄せた浅い椀型である。埋土は 1 層で灰褐色土である。

SK22 は SK21 の南で検出した形状不明の土坑である。検出幅 0.25 m、検出長 0.6 m、深度 0.15m を測る。埋土は 1 層で灰褐色土である。一部を調査しただけで詳細は不明である。

SK23 は SK22 の南で検出した楕円形の土坑である。検出長 1.2 m、検出幅 0.7 m、深度 0.3m を測る。埋土は 1 層で灰褐色土である。

（13 区）12 区から西北西方向に伸びる幅 1 m長さ約 4 mの管路部分からなる調査区である。遺構は検出しなかった。遺物は出土しなかった。

（14 区）9 区から東北東方向に分岐して伸びる幅 1 m長さ約 5 mの管路部分からなる調査区である。遺構は土坑等を検出した。遺物は古代の須恵器・土師器・製塩土器等を出土した。

SP24 は方形のピットである。大半が調査区域外のため詳細は不明である。北辺と西辺の一部を検出した。検出東西長は 0.55 m、検出南北長は 0.4 m、深度 0.1 mを測る。埋土は 1 層で緑灰色土である。緑灰色土は他調査区の灰褐色土が後世の影響を受けて変色したものである。

SP25 は SP24 の東北で検出した楕円形のピットである。長軸は東北～南西を指す。東北端を SK26 に切られている。検出長軸は 0.55 m、短軸は 0.5 m、深度は 0.06 mを測る。埋土は 1 層で緑灰色土である。

SK26 は SP25 の東北で検出した楕円形のピットである。大半が後世の攪乱により削られているため詳細は不明である。検出長軸は南北を指す。検出長軸は 0.8 m、短軸は 0.35 m、深度は 0.15 mを測る。埋土は 1 層で緑灰色土である。

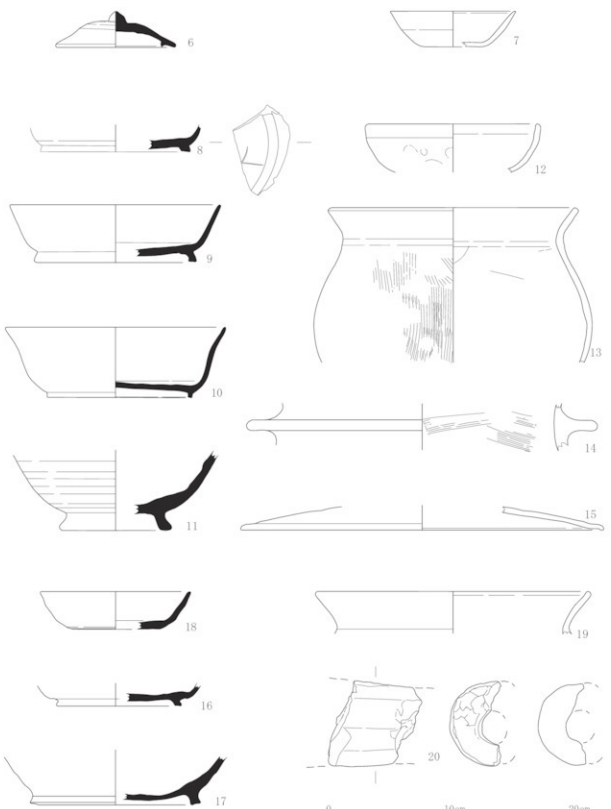
SK27 は SP26 の東北で検出した不定形のピットである。大半が調査区域外ため詳細は不明である。検出東西長は 1.5 m、検出南北長は 0.65 m、深度は 0.15 mを測る。北側にテラスがあり、2 段堀になっている。埋土は 1 層で緑灰色土である。

（15 区）14 区から東北東方向に伸びる幅 1 m長さ約 5 mの管路部分からなる調査区である。遺構は検出しなかった。遺物は須恵器・瓦等を少量出土した。

（6 ～ 15 区出土遺物）

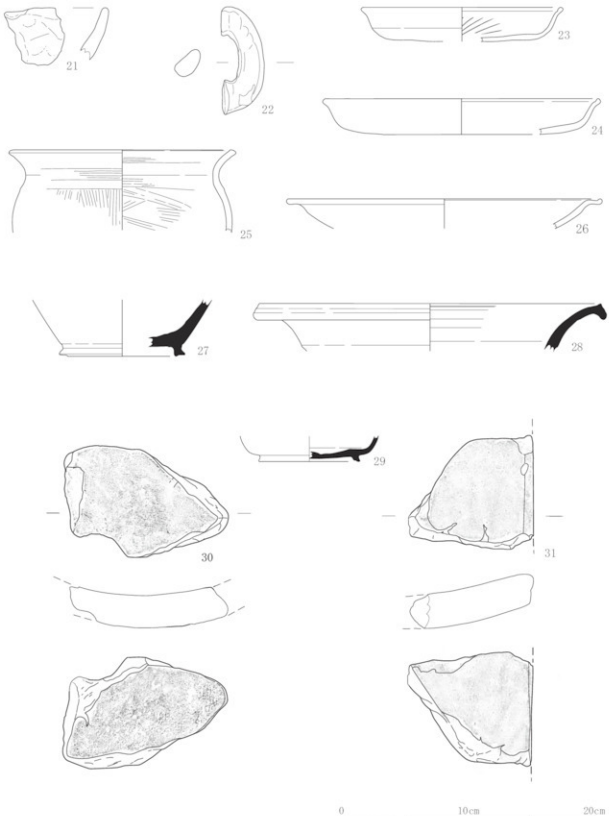
6 は 8 区 SD01 の灰褐色土より出土した須恵器の蓋である。口径 9.4cm、器高 2.9cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに回転ナデである。体部部外面の調整は回転ヘラ削り、内面は回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。 7 は 9 区の灰褐色土より出土した土師器の杯である。復元口径 4.9cm、器高 2.9cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに横ナデである。体部の調整は内外面ともに横ナデである。底部外面の調整はナデ、内面は横ナデである。色調は内外面ともに橙色を呈する。8 は 11 区 SX17 の灰褐色土より出土した須恵器の杯である。残存高 2.2cm、復元高台径 12cm を測る。体部の調整は内外面ともに回転ナデである。底部の調整は内外面ともに回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。9 は 11 区 SX17 の灰褐色土より出土した須恵器の杯である。復元口径 16.6cm、器高 4.6cm、復元高台径 12.6cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに回転ナデである。体部の調整は内外面ともに回転ナデである。底部外面の調整はナデ、内面は回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。10 は 11 区 SX17 の灰褐色土より出土した須恵器の杯である。口径 17.4cm、器高 5.6cm、高台径 11.6cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに回転ナデである。体部の調整は内外面ともに回転ナデである。底部の調整は内外面ともに回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。11 は 11 区 SX17 の灰褐色土より出土した須恵器の壷である。残存高 6.4cm、復元高台径 8.6cm を測る。体部外面の調整は回転ヘラ削り、内面は回転ナデである。底部の調整は内外面ともに回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。12 は 11 区 SX17 の灰褐色土より出土した土師器の杯である。復元口径 13.8cm、残存高 3.7cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに横ナデである。体部外面の調整は指押さえ後ナデ、内面は横ナデである。色調は内外面ともに淡黄橙色を呈する。13 は 11 区 SX17 の灰褐色土より出土した土師器の甕である。復元口径 19.4cm、残存高 12.4cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに横ナデである。体部部外面の調整は刷毛後ナデ、内面はナデである。外面の色調はにぶい黄橙色、内面は淡黄色を呈する。14 は 11 区 SX17 の灰褐色土より出土した土師質羽釜の顎部である。復元口径 28cm、残存高 3.9cm を測る。体部外面の調整はナデ、内面は刷毛である。色調は内外面ともに明褐色を呈する。15 は 11 区 SX17 の灰褐色土より出土した土師器の蓋である。復元口径 28.8cm、残存高 1.9cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに横ナデである。体部の調整は内外面ともにナデである。色調は内外面ともに淡黄橙色を呈する。16 は 12 区 SX18 の灰褐色土より出土した須恵器の杯である。残存高 1.8cm、復元高台径 10cm を測る。体部の調整は内外面ともに回転ナデである。底部外面の調整はナデ、内面は回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。17 は 12 区 SX18 の灰褐色土より出土した須恵器の壷である。残存高 3.9cm、復元高台径 12.2cm を測る。体部の調整は内外面ともに回転ナデである。底部の調整は内外面ともにナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。18 は 12 区 SX20 の灰褐色土より出土した須恵器の杯である。復元口径 11.8cm、器高 3cm を測る。体部の調整は内外面ともに回転ナデである。底部外面の調整は

ナデ、内面は回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。19 は 12 区 SX20 の灰褐色土より出土した土師器の甕である。復元口径 11.5cm、残存高 3.4cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに横ナデである。色調は内外面ともに淡黄橙色を呈する。20 は 12 区 SX20 の灰褐




第 16 図　8 区 (6)・9 区 (7)・11 区 (8～15)・12 区 (16～20) 出土遺物実測図 (S＝1/4)

色土より出土したフイゴの羽口である。復元径 6.8cm、内径 2.7cm を測る。外面の調整はケズリ、内面は絞り痕と棒状具の抜き取り擦過痕である。外面の色調は灰白色、内面は淺黄色を呈する。21 は 14 区の緑灰色土より出土した製塩土器の口縁部である。口径不明、残存高 4cm を




第 17 図　14 区（21～28）・15 区（29～31）出土遺物実測図（S＝1/4）

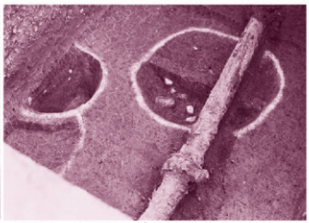
測る。口縁部外面の調整はナデ、内面は指押さえである。外面の色調は灰色、内面は灰白色を呈する。22 は 14 区の緑灰色土より出土した土師器の把手部である。高さ 8.5cm、幅 3.2cm を測る。調整は全面ナデである。外面の色調は橙色、内面は淺黄色を呈する。23 は 14 区の緑灰色土より出土した土師器の皿である。復元口径 15.6cm、器高 2.7cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに横ナデである。体部外面の調整はナデ、内面はナデ後部分的にミガキである。底部の調整は内外面ともにナデである。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。24 は 14 区の緑灰色土より出土した土師器の皿である。復元口径 11.6cm、器高 2.9cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに横ナデである。体部の調整は内外面ともにナデである。底部の調整は内外面ともにナデである。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。25 は 14 区の緑灰色土より出土した土師器の甕である。復元口径 17.2cm、残存高 6.6cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに刷毛後横ナデである。体部の調整は内外面ともに刷毛後横ナデである。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。26 は 14 区 SK26 の緑灰色土より出土した土師器の皿である。復元口径 24.7cm、残存高 2.4cm を測る。口縁部の調整は内外面ともに横ナデである。体部の調整は内外面ともにナデである。色調は内外面ともに橙色を呈する。27 は 14 区 SK27 の緑灰色土より出土した須恵器の壷である。残存高 4.6cm、復元高台径 8.6cm を測る。体部の調整は内外面ともに回転ナデである。底部外面の調整はナデ、内面は回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。 28 は 14 区 SK27 の緑灰色土より出土した須恵器の甕である。復元口径 27cm、残存高 3.8cm を測る。口縁部外面の調整は回転ナデ、内面は工具による回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。29 は 15 区の緑灰色土より出土した須恵器の杯身である。残存高 2.1cm、復元高台径 7.8cm を測る。体部の調整は内外面ともに回転ナデである。底部外面の調整はナデ、内面は回転ナデである。色調は内外面ともに灰色を呈する。30 は 15 区の緑灰色土より出土した土師質の平瓦である。残存長 9.1cm、残存幅 10cm、厚さ 2.8cm を測る。凸面の調整は縄目タタキ、凹面は布目である。凸面の色調は灰黄色、凹面は灰白色を呈する。 31 は 15 区の緑灰色土より出土した須恵質の平瓦である。残存長 8.3cm、残存幅 13cm、厚さ 2.6cm を測る。凸面の調整はナデ、凹面は削り後ナデである。色調は凹凸面ともに暗灰色を呈する。

# 第 4 章　まとめ

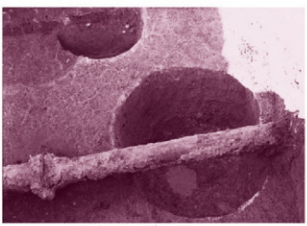
1973 年の調査で報告されていた弥生土器・埴輪等は出土せず、飛鳥時代から鎌倉時代の遺物を出土した。遺構は、溝・柱穴・落ち込み等が検出され、前回の調査結果に非常によく似ている。プールと体育館部分で掘立柱建物が 8 棟検出されており、今回も 1 辺 0.5 ~ 0.6m の隅丸方形の柱穴を検出した。ただ調査区幅が狭く規模は確認できなかった。前回検出したものと組み合わせて建物となるものもあろう。台地・段丘上の開発を始めた集落跡である。

# 図　　版

1区ピット検出状況（南から）

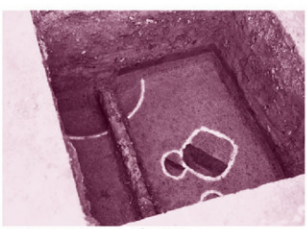


1区ピット検出状況（南西から）

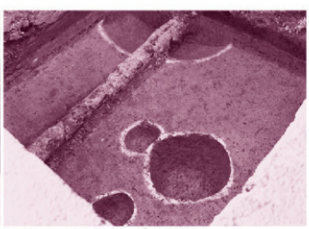


1区ピット2掘削状況（南から）

2区・5区調査状況（南から）

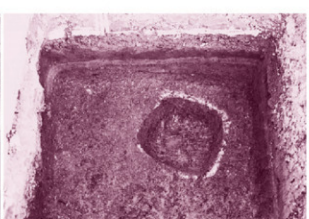


3区ピット検出状況（南から）



3区ピット掘削状況（南西から）

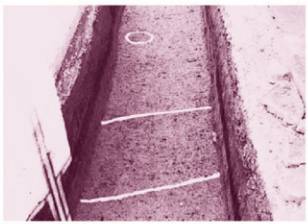
4区掘削状況（南東から）



4区ピット掘削状況（北から）

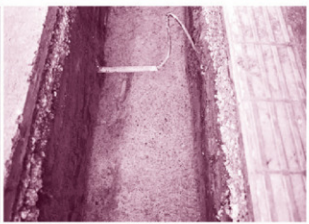
6区（東南から）

6区（西北から）


8区SD01・SP02確認状況（西から）

8区SD01・SP02掘削状況（西から）

9区西半部遺構確認状況（西から）

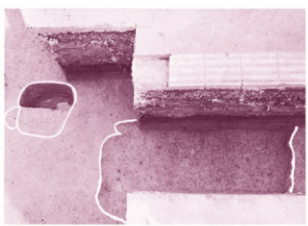

9区SP06検出状況（西から）

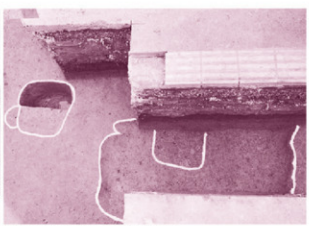
9区SP06確認状況（西から）

9区SP06掘削状況（西から）

9区 SX08・SP09・10 検出状況（東から）

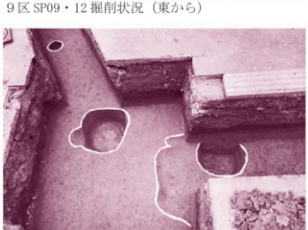
9区 SX08・SP09・10 確認状況（東から）

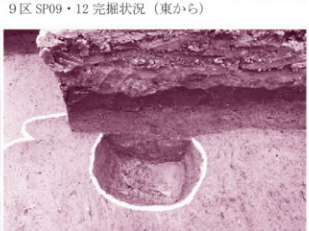

9区 SX08 完掘・SP12 確認状況（北から）

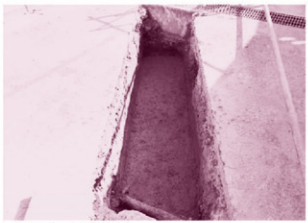

9区 SP12 検出状況（北から）

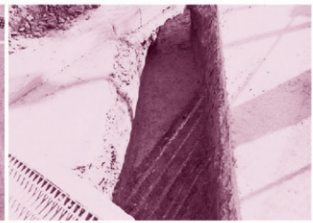
9区 SP09・12 掘削状況（東から）

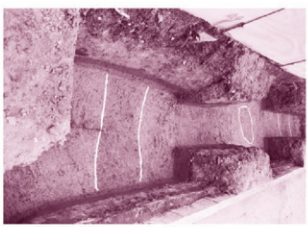
9区 SP09・12 完掘状況（東から）


9区 SP09・10 区 SP11 完掘状況（北から）

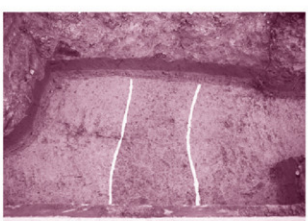

9区 SP12 完掘状況（北から）

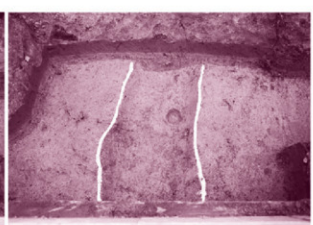

10区中央（西北から）


10区東南（西北から）

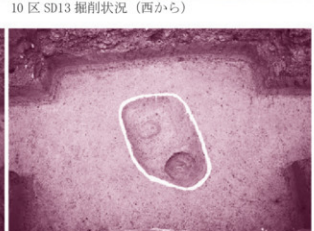

10区北半部遺構検出状況（北から）

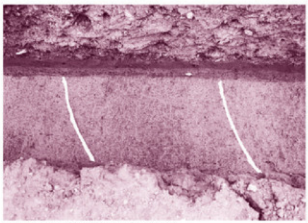
10区北半部遺構掘削状況（北から）

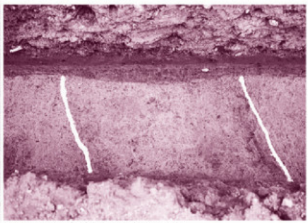

10区SD13検出状況（西から）


10区SD13掘削状況（西から）

11区SP14・15遺構検出状況（西から）


11区SP14・15遺構掘削状況（西から）

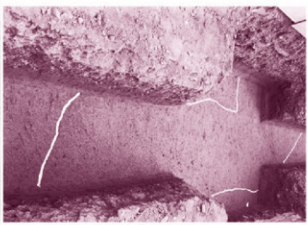

11区SD16検出状況（西から）

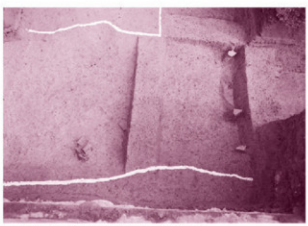

11区SD16掘削状況（西から）

11・12区遺構確認状況（北から）

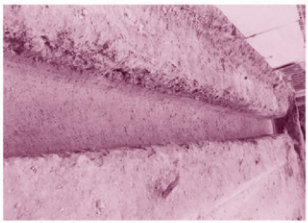
11・12区遺構検出状況（北から）

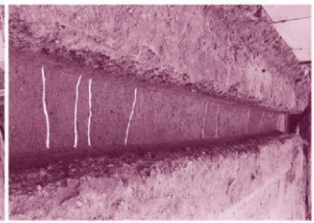
11区SX17確認状況（北西から）

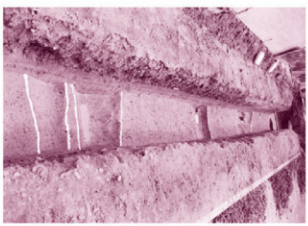

11区SX17検出状況（北西から）

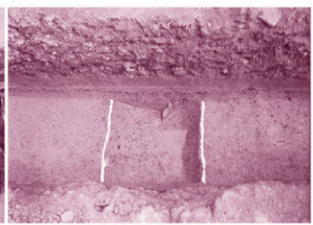

11区SX17遺物出土状況（西から）

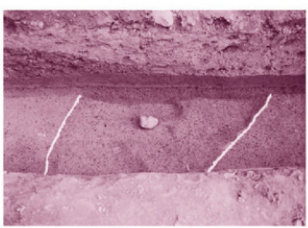
12区SX17遺物出土状況（西から）


12区遺構確認状況（北から）


12区遺構検出状況（北から）

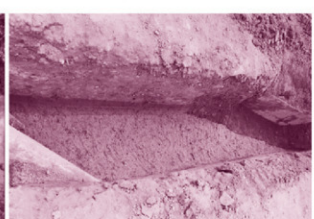

12区SD18・19・20掘削状況（北から）


12区SD20完掘状況（西から）


12区SD21完掘状況（西から）

12区南端遺構確認状況（北から）

12区南端遺構確認状況（西から）

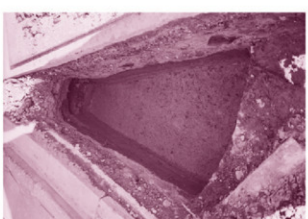

13区遺構確認状況（東から）

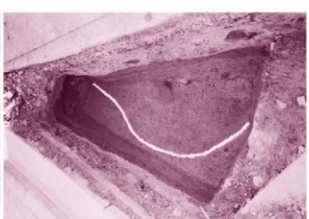
14区西南部（東北から）

14区西南部遺構検出状況（東北から）

14区西南部遺構掘削状況（東北から）

14区SK25・26（東北から）


14区東端部遺構掘削前（南西から）

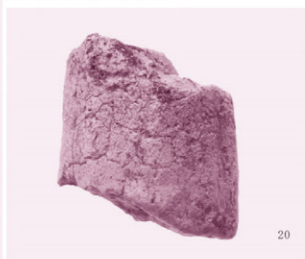

14区東端部SK27（南西から）

15区南西部（東北から）

15区東北部（東北から）

8区 SD01 出土須恵器杯蓋

12区 SX17 出土須恵器杯

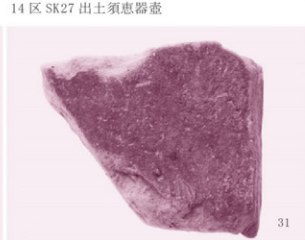



12区 SD20 出土フイゴ羽口

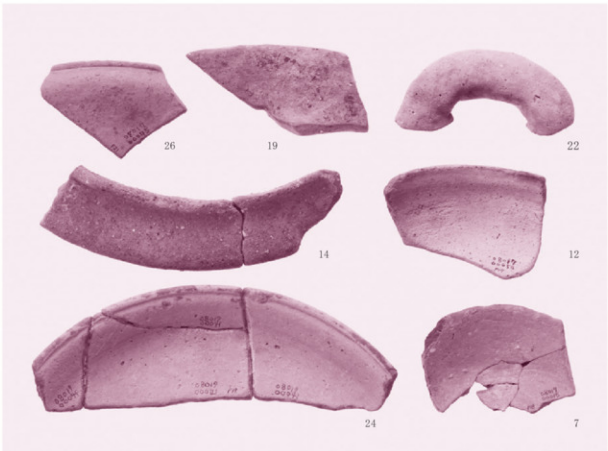
12区 SX18 出土須恵器壺

14区 SK27 出土須恵器壺

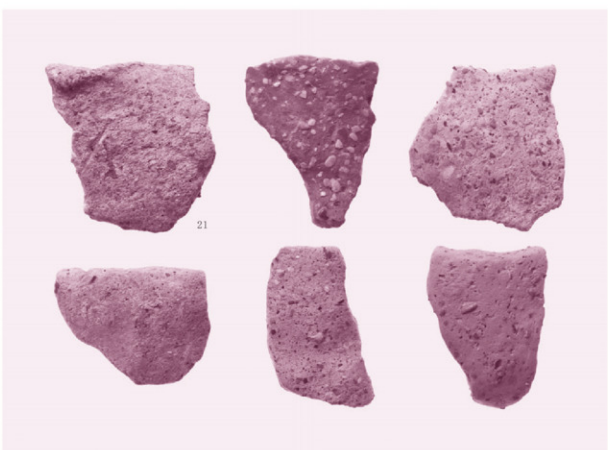
14区包含層出土平瓦




15区包含層出土平瓦




9区～14区出土土師器




14区出土製塩土器

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | かなおかいせき |
| 書　　名 | 金岡遺跡 |
| 副　書　名 | |
| シリーズ名 | 大阪府埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 2011-5 |
| 編著者名 | 藤澤眞依 |
| 編集機関 | 大阪府教育委員会 |
| 所在地 | 〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　TEL　06-6941-0351（代表） |
| 発行年月日 | 2012年3月30日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>° ′ ″ | 東経<br>° ′ ″ | 調査期間 | 面積<br>(㎡) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| かなおかいせき<br>金岡遺跡 | さかいしきたくかなおかちょう<br>堺市北区金岡町 | 27146 | 182 | 34°<br>33′<br>13″ | 135°<br>31′<br>35″ | 20081014<br>～<br>20081201 | 140 | 記録保存調査 |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| かなおかいせき<br>金岡遺跡 | 集落 | 飛鳥時代<br>奈良時代 | 柱穴・溝・<br>土坑・井戸 | 須恵器・土師器・平瓦・製塩土器・フイゴの羽口 | 飛鳥・奈良時代の遺構が高校建設時の盛土の下に良好に残存していた。 |

| | |
|---|---|
| 要約 | 金岡高校の体育館やプールの周囲にある下水管入れ替え工事に先立つ管路・立坑部分のみの発掘調査である。調査区が小さく、あるいは細長く、遺構の全体の様子はよくわからなかったが、飛鳥時代や奈良時代の遺構を検出し、須恵器・土師器などの遺物が出土した。 |

大阪府埋蔵文化財調査報告 2011－5

金 岡 遺 跡

発　行　大阪府教育委員会
〒 540-8571　大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06 - 6941 - 0351（代表）

発行日　平成 24 年 3 月 30 日

印　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所
〒 537-0002　大阪市東成区深江南二丁目六番八号